

## 児童健全育成賞（数納賞）佳作

# 発達特性のある児童の保護者交流としての子育てサロン

## —保護者に寄り添うことで支援の道が広がる—

福岡県北九州市

田原学童保育どんぐりクラブ 学童支援員 金指雪代

### 1. はじめに

田原学童保育どんぐりクラブ（以後クラブと称する）は、北九州市郊外に位置する公設民営の放課後児童クラブである。2010年保育園の敷地内から小学校の敷地内に移転し、35名程度だった児童数が現在では120名の大規模児童クラブとなった。移転当初、田原小学校には支援学級がなく、発達特性から通常学級での生活に、戸惑いやストレスを抱えている児童も少なからずいた。発達特性のある児童にとって、小学校に入学し新しい環境で生活することは、心身ともに気苦労が多い。保護者にとってもわが子が「集団生活についていけるだろうか」「友だちができるだろうか」と不安を抱えての入学となる。保育園や幼稚園でのわが子の言動に、他の子どもとの違和感を覚え、疑念を抱きながら不安と戸惑いに心を痛めている方もいる。小学校入学と同時にかわる児童クラブにとって、発達特性のある児童の保護者支援を行うことは、とても重要な役割となっている。

本報告ではまず第一に、発達特性から、学校生活において様々な支障が生じ、問題行動をとるようになったAさんの保護者と深くかわるうちに、これまで難しかった学校や保護者との連携が図れるようになった経緯や効果について報告する。連携することで、保護者に対する認識の違いや、発達障害児支援のための特別支援教育相談センターと北九州市立総合療育センター

（以後療育センターと称する）の相互領域の違いについても明確になってきた。

低学年が大半を占めるクラブにおいて、早い段階で私たち支援員が、児童の困り感や違和感などの気づきを保護者と共有することで、児童が安心し、自己肯定感を育みながら成長しているのではないかと考えている。児童が自分の気持ちをうまく表現することができず、周囲とトラブルを起こすたびに保護者と話す機会が増え、保護者の胸の内に秘めている悩みや不安が想像以上のものであることを思い知らされた。

私たちは、保護者の気持ちに寄り添うことができれば、児童の困り感も軽減できるのではないかと考えた。そこで私たちのクラブでは、4年前より発達特性のある児童の保護者同士が心の中を共有できる場として子育てサロン（以後サロンとする）を立ち上げた。そしてサロンを通して次のようなことが明らかになってきた。

- ①通常学級から支援学級、中学校就学などの節目での進級進学手続きが保護者にとって不明瞭なことが多く、不安に感じた期間がとても長いこと。
- ②発達障害児支援の現実や放課後デイサービスを利用することへの躊躇。
- ③発達特性のある児童の両親の夫婦間に温度差があること。
- ④支援員にとって児童の家庭での様子を知ることと、その子の特性に合った支援の手立てが

見いだせることなどである。

私たち支援員にとって「give and take」の情報共有ができていることが、一番の利点でもある。

私は目の前の児童支援はもちろん、保護者支援も同時に行なうことは、将来を見据えた発達障害児支援の観点でとても重要であると考えている。本報告の第4章で保護者支援がうまくいくことで、各専門機関、学校との連携が取れ、発達特性のある児童の成長に高い成果が表れた事例も報告していきたい。

## 2. 連携したことで見えてくる支援の方向性

5年前、学校と保護者の密な連携がなくては支援ができない状況に陥ったAさんがクラブに入所してきた。Aさんとのかかわりが、保護者支援と各関係機関との連携の必然性を考えさせられる、クラブの発達障害児支援の要となる事例となった。

### 2-1 学級担任、保護者との連携の第一歩となったAさんの事例

Aさんは1年生よりクラブに入所、コミュニケーションが苦手なため対人関係がうまくいかずに、特定の子としかかかわることができなかった。こだわりが強く周囲との協調が取れず、また興奮すると自分を見失うため、些細なことで暴れることも多かった。室内でフードを被っていることも多かった。Aさんは4歳になるまで、母親の仕事中は曾祖母に預けられていた。曾祖母とのかかわりは、折り紙や絵本を読んでもらうなど静かな遊びが中心だった。公園など郊外で同世代の子どもとかわることはなかった。幼少期のAさんはほとんど手のかからない、おとなしい子どもだったようだ。両親ともに前向きに私たちの呼びかけには応じてもらえるが、発達障害に対する問題意識は少なかった。母親の成育歴から子育てをどうしてよいかかわらない部分があり、行動力に緩慢な部分があった。私たちはAさんの支援にあたり、母親との愛着関係の築き直し・育ち直しから始める必要があ

ると考え、母親支援も同時に行った。Aさんは2年生になり学校の中でもトラブルメーカーとなっていた。教室に入らず、外で過ごす時間が多くなり、給食と体育以外は参加しなくなっていった。授業中に学校の外に出てしまい、先生たちが外まで追いかけたり、校庭で取り押さえたりする姿を見かけるようになった。そこで学校は支援学級への移籍を母親に提案することにした。しかし母親は育児に対し消極的であるためか「就学に関する手続き書類を手渡しても全く返事がない」と学級担任は頭を抱えていた。母親に電話をかけても応じてもらえず、自宅を訪問しても留守で連絡が取れない。そんな状態が続いたある日、手続きの期限が迫り、学級担任からクラブに連絡が入った。支援員とは気さくに話す母親だったため、私たちが協力することになった。支援員から母親に電話を入れ、クラブに来てもらった。支援員が横について助言しながら、就学手続き書類を作成し学校に提出してもらった。これによってようやく次年度から支援学級への移籍が決まった。

今回の件で私たち支援員と学級担任が密にかかわる機会ができ、保護者に関しての認識などで、学校側との温度差があることを知った。これを機に保護者支援について、これまで以上にクラブ全体で取り組むようになった。これまで児童とは、じっくり時間をかけ、かかわっていたが、保護者とゆっくり向き合うことはあまりできていなかった。保護者に対しては、言葉の裏にある背景を読み取ることが難しく、関係性を築くのに時間がかかるため、対応がどうしても消極的になってしまっていた。しかし児童支援のためには、保護者の協力は必要不可欠なことである。保護者が子どもと向き合えるように支援していくこと、学校と保護者間での意思疎通で足りないところを補うことも、児童クラブの役割と言っても過言ではない。

### 2-2 総合療育センター受診

母親とじっくり向き合うようになり、母親自身の困り感が見えてきた。私たちは母親にも発達特性があるのではないかと考え、それを踏ま

えた上で上手にかかわっていく必要があった。Aさんの迎えに母親が来所した際には、ゆっくり話をするようにし、私たちとの関係性を深めていった。母親との信頼関係が築けるようになった頃、発達障害児支援としての専門機関である療育センターへAさんの受診を提案した。療育センター受診に向け動き始めたのは、Aさんが2年生になった7月頃からである。3回の受診を重ね、11月上旬『自閉症スペクトラム、ADHDの傾向がうかがえる』との結果が出た。療育センター初診から5か月を経て、正式な診断名が付き、ようやく学校とクラブの両方で、正式に支援体制がとれるようになった。母親とのかかわりを通して、これまで私たちが発達障害児支援に関して見えていなかったこと、保護者の不安やストレスについてなど様々なことが浮き彫りになった。このような事例を契機に発達障害児の支援を考える上で、その背後にある保護者を支援することが、より重要となっているのではないかと考えるようになった。

### 2-3 保護者支援は発達障害児支援の要

Aさんの学校での問題行動が大きくなり、その度に母親が学校に呼び出されるようになった。クラブの中でも友だちとトラブルを起し、暴れる日々も多くなってきた。学級担任と母親そして支援員が、毎日のように行動を共にするようになったことで、いろいろなことが見えてきた。学校側は保護者が子育てに対してネグレクトであると決めつけていた。そのことで保護者との間に溝が生じていた。保護者は、わが子が「周囲に迷惑をかけている」と捉え、うつむき気味になってしまっていた。支援員は児童のお迎えなどで、保護者と直接コミュニケーションをとる機会が多かった。学校とクラブが連携を図ることで、より正確に家庭環境など把握することができた。

### 2-4 初めて聞く専門用語に保護者は困惑

私たちが児童の困り感を保護者に伝えた時、保護者自身も子育てに悩み、発達障害の診断名が付いたことで困惑し、将来に不安を抱かれたりする。就学にあたり「学校から教育相談を受

けるために、特別支援教育相談センターに行くように」とか「通級学級を考えましょう」と言われ、初めて聞く言葉に何が何だかわからないまま、時が流れ焦りを感じる方もおられる。

保護者は、発達障害の診断名を聞いても、それがどういった症状なのかを理解するのも戸惑いがある。それに加え、学校での『就学申請』や学童クラブでの『加配申請』共に受理承認されるまでに、期限や時間を要するため、慌ただしく動かざるを得ない状態にある。支援員が少しでも保護者の気持ちに寄り添い、保護者を支援することが望ましいことはわかっている。しかし、これまで保護者の胸の内が分からず、私たちから話を切り出せないことで支援が遅れ、双方共に苦い経験をたくさんしてきた。そこで少しでも保護者と私たちとの距離が縮まるように、そして保護者同士の交流が図れるようにと考え、4年前より学期に一度の割合で『子育てサロン』を開催するようになった。

## 3. 保護者の心の交流場としての『子育てサロン』

クラブでは在籍するすべての保護者を対象に「夏休み説明会」と「次年度更新説明会」を開催している。夏休み説明会終了後の茶話会では、クラブでよく遊んでいる児童の保護者同士でグループを作り、交流を深めてもらっている。その時には会話が弾むように、普段子どもたちが食べているおやつを提供している。次年度更新説明会の終了後には、支援員が保護者と個人懇談を行っている。その待ち時間を利用し保護者交流をしてもらっている。しかし、発達特性のある児童の保護者は、交流の場で自分の胸の内を話されていないように思われる。説明会后に足早に帰られたり、部屋の片隅で誰とも交流を持たれていない姿も目にしたりもした。

### 3-1 『子育てサロン』始動

そこで発達特性のある児童の保護者同士の交流の場として『子育てサロン』を開催することにした。サロンは、クラブの加配担当を含め2～3名の支援員が同席している。まずは参加さ

れた保護者の子どものクラブでの様子などについて、支援員から話すところから始まる。そして保護者からの相談を受けたりもする。支援に関する情報提供や書籍の紹介、貸し出しをすることもある。一通り私たちとの情報共有が終わった後は、保護者だけで親睦交流を深めてもらっている。はじめはどちらかと言えば私たち支援員が主導権をもった会だった。しかし回数を重ねるごとに、保護者に変化が見受けられるようになってきた。消極的だったAさんの母親が、わざわざ自分から「今度のサロン参加します」と伝えるためクラブに来られるようになった。保護者間でLINE交換をしプライベートでの交流もされるようになった。

サロンは2017年7月1日から各学期に1回開催している。参加対象はクラブで発達障害児として加配申請をしている保護者だ。対象児童が卒所しても、継続を希望される方には案内を出している。私は初めて子育てサロンを企画し案内を出したとき、保護者はどんな風を感じ取られるかがとても心配だった。しかし開催後のアンケートで皆一様に、同じ状況下にある保護者と話す機会が持てたことを喜ばれ、次の開催を楽しみにされていたことが分かった。「子育て、とくに発達障害のある子どもとのかかわり方や、支援方法などの悩みを共有できたこと、同じ立ち位置で話せたことがとても良かった」という意見が数多く出された。

### 3-2 保護者ネットワークの広がり

サロンにどうしても参加してもらいたいと考える保護者がいた。支援員から再三にわたって声掛けをしていたが、いつも空返事だった二人の保護者が、第6回のサロンに初めて参加された。

一人はわが子の発達障害と向き合うことができず「自分はこの子が生まれて壊れてしまった」と口にしていて、わが子を迎えに来た時も無表情で暗い感じだった。この母親に、ぜひサロンに参加し同じ境遇の保護者と交流を持つことで、気持ちを前向きに持ってもらいたかった。

もう一人はわが子の発達障害を認めてはいる

が、多忙な仕事を口実に、わが子の発達障害を軽視し、何事も後回しにしてしまっている方だ。児童の問題行動が日を迫るごとに大きくなってきているため、私たちは迅速に支援体制をとらないと、ますます困り感が表面化してくると懸念していた。

この回のサロンはこれまで以上に盛り上がった。前半はこれまで同様、私たち支援員も同席し情報共有を行ったが、その後の保護者だけの時間は2時間を超過した。この日、初参加の二人の母たちは口々に「参加してよかった」「あつという間に気づいたら、こんな時間になっていた」と、とても明るい表情で帰って行った。この時の交流をきっかけに、わが子と向き合うことができなかつた母親は、子育てに少し前向きになったように感じられる。今ではここで知り合った方と、PTA役員と一緒に引き受け、プライベートでもかかわる時間を持たれるようになった。

### 3-3 夫婦間での見解の相違

サロンにおいて、参加された母親から「お父さんと子どものことで意見が合わなくなってきた」「お前のしつけが悪いから、アイツが言うことを聞かないんだと夫に叱責される」「子どもが成長するのに伴い、次第に困り感や他の児童との違和感が出てきて、夫と益々意見が合わなくなってきた」「夫が子どもに苛立ちの矛先を向けることも多くなってきた」「子育てに協力的でない」などの声が聞かれた。

子育てに関して夫婦間での意見が食い違うことはよくあることだ。しかし、子どもの発達特性が理解できず、そこから逃避してしまったり、夫婦関係が冷えてしまうこともある。

夫婦間での見解の相違については、父親の理解協力を求めていく必要はあるが、まずは母親同士が「そうだよねえ。うちも一緒だよ」と皆で愚痴を言い合っただけで気持ちをスッキリさせることも大切である。これこそがサロンの最大の目的でもあるストレスの解消につながっている。

サロンに参加しているのは母親ばかりなので、父親へのアプローチをどうするかが、今後の課題になっている。父親だけのサロンがあれば父

親の立場からの意見も聞けるかもしれない。

### 3-4 中学進学に対する不安

サロンは回数を重ねるたびにメンバーが少しずつつわっている。初めて参加される方は、最初はとても緊張されているがすぐに打ち解けられる。今年度初めて参加された方は、わが子の中学進学に対する不安な胸の内を相談された。先輩のお母さんから、わが子の中学進学までの経緯や中学校生活の様子、特に今年は新型コロナの影響で学校が休校になり、いつも以上に不安なスタートになり、自粛期間中の家での子どもの様子についてなどいろいろ話してもらえた。

小学校で知的支援クラス在籍だったわが子が、中学校は友だちと同じ校区の中学校に通いたいと切望した。校区の中学校には情緒の支援学級しかないため、通常なら知的支援学級のある近隣校区の中学校に通うことになる。発達特性のある児童が進級するにあたっては様々な問題が生じてくる。どこの学校にも支援学級があるわけではない。またわが子に合っているかなど不安を抱え、見学や体験に行かれている。保護者にとって、わが子の将来を考え、その子に合った進路を考えたいと願うことは、健常児の保護者よりも強いように思われる。以前クラブに在籍していた軽度のADHD児童の母親は、その子が小学校4年生の時に親子で、中学校と高校の両方を見学に行かされていた。将来の進路を親子で考えてのことだった。

子どものことを気軽に相談したり、話せる場が身近に少ないことに悩まれている方は多い。サロンにおいて、お互いの悩みを打ち明け、将来に光が見えたことに安堵されているようだ。また悩みを話すことで気持ちが軽くなり、参加された皆さんが生き活きとされている。

### 3-5 将来性を見出す『子育てサロン』

サロンの日程設定は、私たち支援員が行っているが、中身は保護者主導でその時間を使ってもらっている。私たちが子どもたちとかかわれる期間は数年しかないが、家族と子どもとかかわりはずっと続いていく。子どもが成長していく中で、将来自分の発達特性が周囲に理解さ

れずに悩んだり、こだわりから衝突することも出てくると思う。私たちはそんな時に子ども自身が相談できる場所を、たくさん作ってもらいたいと考えている。療育センターは、18歳まで利用できる発達障害者支援の専門機関である。今は保護者と一緒に通院しているが、思春期になり悩みを抱えた時には、自力で相談に行くことができる。私たちは、そのためにも早い段階から専門機関とつながってもらいたいと考えている。私たちは、保護者と児童クラブ、学校、専門機関との連携がうまくいった時に、初めて発達障害児支援が良い方向に機能していくと考えている。次の章において保護者と児童クラブ、療育センター、特別支援教育相談センター、学校とが円滑に機能したことで、児童の発達に著しく成果が上がった事例を紹介する。

## 4. 保護者中心の連携が功を成した事例

私は発達特性のある児童を支援するためには、まずは保護者に寄り添うことが、最良の手法であると考えている。これまで目の前にいる児童の支援に追われ、保護者支援に重きを置くことはなかった。しかし本報告の前述部分で述べてきたように、保護者に寄り添うことがいかに大切であるかを知り、クラブとしての支援の方向性が変わってきた。サロンを開催するようになり、発達特性のある児童の保護者との関わりが密になったことで、様々な支援に関する情報が入ってくるようになった。そして保護者の前向きな行動が発達特性のある児童の将来性を、大きく切り開いていくことも実感できるようになった。次節において母親の行動力で、発達障害児支援が大きく変革した事例について取り上げている。

### 4-1 母親の行動力に周囲が変化

その母親とは、兄が1年生でクラブに入所したときからのかわりになる。兄は1年の時に「教育相談を受け、知的支援学級への編入を視野に入れて考えていきましょう」と学級担任から言われた。そして『注意欠陥多動性障害、学

習障害』の診断が出された。翌年からクラブでは加配制度の適用となり担当支援員がつくようになった。しかし当時小学校には情緒支援学級はあったが、知的支援学級はなかった。そこで母親は、自力で支援のための関係機関に問い合わせたり、学校長に嘆願書を書いたりもされた。その甲斐あって2年後に、通学している小学校に知的支援学級ができ、そこに在籍できるようになった。そこまでの母の大変さは計り知れないものだったと思う。私たちからサロンにおいて、発達障害児支援についての様々な情報を提供した際も、この方はすごく積極的に話に参加されている。今ではサロンのリーダー的存在になっている。

#### 4-2 作業療法の訓練を知る

北九州市は、毎年さまざまな発達障害児支援のためのセミナーを開催している。その中の一つに発達障害支援センター主催の「生活の中の感覚統合」というセミナーがある。支援員がそれに参加をし、初めて療育センターの作業療法訓練を映像で見ることができた。そのことを子育てサロンに参加されている保護者にも伝えたところ、わが子（Bさん）の療育センター受診の時、心理士に相談し作業療法士に診てもらえることになった。Bさんは作業療法訓練で、改善見込みがあるということになり、その時から定期的に訓練を受けることになった。

クラブにおいて、発達障害の疑いがあり療育センターを受診されている方は多い。しかしこれまで児童精神科や小児科を受診することはあっても、作業療法の訓練を受ける子どもはだれ一人としていなかった。私たちもどうすれば作業療法の訓練を受けられるかが分からなかった。

わが子に発達障害の疑いがある保護者は、療育センターの専門家を受診し、訓練で少しでもわが子の困り感が軽減するのであれば、受けてみたいと願っている。しかし、療育センターの作業療法は直接受けられるものではなく、小児科や心理士の先生からの紹介がいるため、限られた人しか作業療法科を受診できていないよう

だ。Bさんは作業療法の訓練を受けるようになり、驚くほど成果が上がり、本人の言動に変化が表れてきた。クラブや学校でも、落ち着いて物事に取り組めるようになり、学習意欲も向上してきている。本人が楽しんで訓練を受けている姿を、私たちは母親から動画を見せてもらい知ることができた。

#### 4-3 保護者を中心に深まる関係機関との連携

クラブと学校、そしてクラブから療育センターとの連携は、比較的取りやすい。しかし保護者が、各関係機関との連携の中心になることで、発達障害児にとっての支援の道が大きく広がり効果も上がることが、上記の母親の行動から見えてきた。保護者はすべての関係機関とつながっている。だから私たち支援員が保護者と深くつながることで、各関係機関とも間接的にかかわることになっていく。実際にこの母親から私たちは、常に療育センターでの作業療法訓練の様子やリハビリテーション実施計画、そして特別教育相談センターでの教育相談実施報告書も提供してもらっている。それらはクラブでの支援にとっても役立っている。また母親は療育センターでの検査結果についても、クラブ、小学校の両方に提出している。それらには発達障害児にとっての適切なアドバイスの詳細が記されており、児童にとっての支援にとっても役立っている。私たちからだと、つながりにくい専門機関とも、保護者を通すことでスムーズな関係性が築け、その後も情報共有ができるようになってくる。

(図1参照)

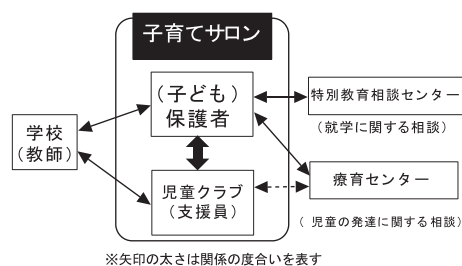


図1. 保護者と各関係機関との連携関係図

しかしながらクラブも学校も、その児童や保護者とかがかわれる期間は限られている。だからこそ発達障害の早い段階で支援し、将来の見通

しをつけることが何より大切であると考え。

## 5. 見えてきた支援体制の問題点と課題

2016年発達障害者支援法の改定により、発達障害者に対する支援、及び発達障害者の家族支援も行われるように法制度に明記された。これにより発達障害者の支援が切れ目なく行われ、より充実したものになるようになってきた。それに伴い多くのメディアなどで、発達障害の早期発見・支援について取り上げられるようになった。現在、専門的に発達障害の診断や、発達支援ができる病院（療育センターなど）に受診希望者が増え、申し込みから受診に至るまでの期間が8か月を要するようになってきている。通常学級に在籍する発達障害のある児童が、クラブで加配申請を行うためには、医師の診断書か意見書が必要になってくる。しかし、児童のかかりつけ医の意見書では受理されず、発達障害の専門機関でない認められていないのが現状である。療育センターでも診断名が付くまでに、初診から数か月を要する場合もある。発達障害の診断には、その子の将来がかかっているため慎重性が求められることから、診断名が付くのに時間が必要なのは理解ができる。しかし、保護者がわが子の発達障害を前向きに受け止め、その子にとって最良の支援体制をとろうと行動をしているとき、その申請から受理に至るまでに時間がかかり過ぎるのは、保護者にとって不安感、そして子どもにとっては困り感を増大させてしまうことは問題である。そんな現状を踏まえ私たち支援員に何ができるのかについて考えてみた。

## 6. クラブにおける支援体制の今後

加配申請をすることで正式に担当支援員を配置し、児童に寄り添った支援ができるようになる。担当が付くことで児童は周囲とのトラブルや困り感が軽減される。職員配置にも余裕ができるため、他の児童への配慮も行き渡るようになる。しかし、加配申請には診断書が必須とい

う高いハードルがある。そこで私たちはどうすればよいかを考えた。支援員が協力体制をとり児童情報を共有し、支援員の誰もがその対象児童の理解に努めることで、支援員が一様の対応をとることができる。そうすることで周囲の児童も対象児童の言動を理解し、共感してもらえると考えた。認定された児童については、担当支援員が毎日個別記録をつけている。まだ認定されていない児童については、個別ファイルを用意し、特に気にかかる言動が見られた時や成長が感じられた時などは、気付いた支援員が記録している。

サロンへの誘いは、現時点でクラブにおいて加配申請されているか、もしくは加配に向け進行中の児童の保護者を対象に行っている。それは同じ状況下にある保護者が、児童のことで優劣をつけることなく、心安らぐ交流の場にしてもらいたいからである。「わが子が3年生なのに1年の勉強も理解できていないことに悩まれているので、サロンに誘ってもいいか？」と聞かれたことがある。しかし、クラブ在籍児ではあるが、加配児童ではなかったため断った。私は今でも、この事がずっと心にわだかまりとなっている。今後はサロンへの参加は、保護者に委ねてもよいのではないかと考えている。サロンは、これからも保護者中心の心の交流の場として、保護者自身が自然な形で参加されなくなるまで、これからも支えていくつもりである。

## 7. おわりに

サロンを通して保護者と深くかかわるうち、保護者のとても前向きな姿勢とわが子に対する行動力に感心させられた。また、子どもの成長を温かく、そして強く見守っている姿に、支援員も励まされエネルギーをもらっている。

ある保護者が「どうして自分の子どもが普通に生まれてきてくれなかったんだろう。なんで私なんだろうと悩んだ時もあったけれど、発達障害について知るうちに、私だからこの子を育てられるんだと思えるようになった」と話された。他の母親たちにこの言葉がどう響いたのか

など思いながらも、このサロンを続けてきた意味があったと確信した。

児童虐待や子どもの貧困など保護者が起因する問題が多発している昨今。またコロナ禍での子育ては、親にとっても精神的に大きなストレスがかかっている。特に、発達特性のある児童の子育ては、山あり谷ありで「なんでなんだろう」「これからどうなるんだろう」と悩みと不安の連続となっている。これからも保護者が元気になるように、わが子を産んでよかったと思えるように、精一杯保護者支援に力を注ぎたいと強く考えている。 以上